
蒼の狼

瑠亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼の狼

【Nコード】

N3323W

【作者名】

瑠亜

【あらすじ】

お知らせ…

読みやすくするために、文字数を大幅に減らしました。更新もこれで少しは早くなります。

1ページが原稿用紙1枚分です。多分…

時々内容の修正をしたりします。

大幅に修正したり、少し変えたりと様々です。

あらすじ、章のタイトルはある程度本編が書き終わったら書きます。

2012/01/09 修正完了、掲載しました。

#0 【1】（前書き）

やはりこのような小説の場合、主人公の心情の変化を強調した方がいいのかな、ということ、慣れない一人称に挑戦しました。このまま頑張ります。

#0 【1】

校舎の外は、身体の芯まで凍えてしまふような寒さだった。

嵐のように吹き荒れる雪によって、あたり一面は雪化粧した街へと一変している。

つい1、2時間ほど前の景色の面影は、既にそこには無かった。

僕はマフラーを首にかけ、傘を差すと校庭に出た。

風は静かだったが、雪は容赦なく傘に打ち付ける。鈍い音が絶えず響く。

雨の時もよく出るこの音が、僕は嫌いだった。なんとなく、無数の『音』に、頭を

撃ち抜かれたような、そんな感覚がするからだ。

僕は傘を閉じると、そのまま校門へと足を運ぶ。大量の雪が全身に降りかかるが、

あの音を聞いているよりは断然ましだった。

#0 【2】

多量の雪を被った校門は、少し指先が触れるだけでも冷たく、凍て付いていた。

僕は制服の袖で手を庇いながら、校門をゆっくりと開ける。

耳障りな金属音が、辺りに響いた。この音がする度に、門を外して欲しいと思う。

車道と歩道に分かれていた筈の道路は、最早雪で境界線が消されていた。車道との段差も

見えない為、僕は慎重に歩道の端を歩く。

開いていた校門が、閉まり始めたのだろつ。あの耳障りな音が後ろから聞こえた。

しかし僕は振り返らず、ただ溜息をつく。そして少しばかり、足を速めた。

ふと、二人の女生徒に追い抜かれた。話し声が耳に入るが、その前に傘に雪がぶつかる

あの音が聞こえた。僕は立ち止まり、音が聞こえなくなるのを待つ。

#0 【3】

嫌いな音が多すぎる。それも、黒板を引つ掻いたときに出るような、皆が嫌がるような音ではなく、普通ならなんとも無い音ばかりで、例外は、あの校門の音だけだった。これは単に僕の耳が良いからなのかは、定かではない。

ただ、耳が良いからといって、別に優越感を感じたわけではない、という事は言える。

「はぁ……」

僕は、今までで一番重い溜息をついたと思った。

……それから数分後、僕は住宅地へと足を踏み入れた。

家々の屋根には雪が積もり、細かい粒が落ちてきているのが窺える。氷柱がぶら下がっているのもあった。

滅多に見たことの無いそれを、僕は立ち止まって眺める。透明感溢れる氷の柱は、今までに見てきた何よりも美しかった。

#0 【4】

持ち帰ってしまおうか——つい、僕はそんな事を一瞬考えてしまう。
しかし、すぐにその考えを振り払うと、重たい足をまた動かし始めた。

「なんか……疲れたなあ」

と呟きながら。——体とか、精神面ではない。ただ、言葉通り、最近は何となく疲れている気がする。

別に嫌な事があつた訳ではないのだが、何というか、『日々の日常に疲れていた。』

平凡すぎる……無論、それが当たり前なのだが、僕はどうもそうは思わない。

人生は長い。なら、少なくとも一、二回くらいは不思議な経験とかをしてもいいのではないか。

あまりにもつまらない人生など、退屈そのものだろう。

#0 【5】（前書き）

小説で約5ページ目…だと思います

#0 【5】

小説や漫画の主人公が、本当に羨ましかった。

主人公がたとえ自分だとしても別になんともないし、その上パラルワールドに

行かせる事だって出来る。竜に出会ったり、魔法が使えたり、獣人になってしまったりする事も、文章や絵の中で幾らでもできる。

小説や漫画はそんな夢のような世界なのだが、生憎現実には、『常識』によって、永遠に縛られながら生きていかなければならない。

何と不自由な世界な事だろう。僕はまた溜息をつく。

……雪が顔に降ってきて、我に返った。

僕はいつの間にか、足を止めていたのだ。通行人が不思議そうな目で、僕を見ている。

顔が一気に熱くなった。僕は『すいません』と小さく言つと、すぐにその場から離れた。

#0 【6】（前書き）

路地裏は健在です。

#0 【6】

もう、つまらない事で考え込むのは止めよう。

今のように、恥ずかしい目にあってしまう。僕は大きく息を吐くと、先程の事を忘れようとした。

しかし、中々忘れられない。住宅地でも雪合戦をしている生徒達を見かけても、住宅地を抜け、家への近道となる暗い路地裏に入っても、『退屈』という言葉が頭を離れない。

授業で習った公式など、忘れてはいけないものはすぐ忘れてしまうのに、忘れたと思う事はどうしても忘れられないのが不思議だった。

ふと、足が滑ったような気がした。視線を下に向けると、コンクリートの道が凍っていた。

路地裏全体の道が、まるで絨毯のような氷で覆われていたのだ。

#0 【7】

危なかった。思わず腰が抜けてしまい、僕はその場にへたり込む。

路地裏は、住宅の間に挟まれている道だ。そのせいで雪があまり降らず、氷が張ってしまったのだろう。

僕は壁に手を付きながら、慎重に歩き始めた。

思った以上に、足が滑る。油断すると、すぐに転んでしまいそうだ。

足を一步步ずつ踏み出す毎に、靴底から砂利を踏むような音がする。

この辺りの氷は、

少し溶けかかっているのだろうか。

……時々転びそうになったりしながら、数分の間、僕は暗い道を進んでいた。

こんな時に限って、いつもこの道は長く感じられる。単にゆっくり進んでいるだけかも知れないが。

#0 【8】

どちらにしろ、僕はあまりこの道が好きではない。

この道を出ればすぐ家で、大変近道になるから、嫌いというわけでもない。

ただ、どこか嫌かな感じがするのだ。正確には、小学生の頃からずつと。しかもそれは

日にちが過ぎることに、少しずつ強くなっている。

今もそれを感じている。それは、昨日とは比べ物にならないくらいだった。

冷や汗が、一滴、二滴と落ちていく。ここは、他の事でも考えて気を紛らわした方が良いのだろうか。

とりあえず、思いつくままに、頭の中でイメージを作ってみる。

蒼、これは僕の好きな色。

青とは少し違うところがまた良いと思う。

#0 【9】（前書き）

結構、自分の顔って思い浮かびませんよね。
…僕だけでしょか

#0 【9】

次に思い浮かんだのは、お母さん。黒髪で、大人らしい顔立ちをしていた。

お父さんのイメージは、思い浮かばない。何故なら、十数年前に亡くなっているからだ。

交通事故で亡くなった、とお母さんから聞いた気がする。

何故だか、僕の顔は思い浮かばなかった。顔とか、姿は全て覚えていた筈なのに、何故か浮かばない。

まだ想像力が足りないだけなのか。僕は小さく笑うと、視線を前に移す。

完全に前を見る、ほんの少し前。僕は先程求めていたものが目の前に現れた気がした。

平凡な日々をひっくり返す、不思議な出来事というものが。

「……え？」

僕は、思わず声を上げてしまう。

——蒼い渦が、僕を飲み込むように目の前に立ち塞がっていたのだ。

#0 【10】（前書き）

小説で約10ページです。

#0 【10】

若干白い渦も混ざるそれは、右に左に、あらゆる方向に渦巻いていた。

漫画でも見たことがある——これはまさに、異空間への入り口。

僕は思わず生唾を飲んだ。喉がゴクリと鳴る。

現実離れた光景に対する恐れと、本当にあつたのか、という驚きの気持ちが入り混じる。

声を上げられなかった。僕はただ渦を見つめるだけしか出来なかった。

——そんな僕の様子を感じ取ったのか、渦が一瞬光った。

周りの景色が歪む。地面が音を立てる。

それに驚いて僕が思わず声を上げる前に、僕の体は宙を舞い、すさまじい速さで渦の中へと吸い込まれた。

#0 【11】（前書き）

#0 もあと少しで終わります。
…多分

#0 【11】

今回は、「蒼の狼」を読んで頂き、誠にありがとうございます。

#0 【11】は、現在執筆中のため、公開しておりません。

お気長にお待ち下さい。

こちらでも、執筆は全力でやっておりますので、

応援していただけると助かります。

……そして、やる気が出ます。

まだ小説を書き始めて一年ほどのひよっこな僕ですが、

この小説で、一人でも多くの方に

楽しんでいただけたら幸いです。

これからも『蒼の狼』を、よろしくお願いします。

. . . by 瑠亜

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3323w/>

蒼の狼

2012年1月9日14時45分発行